洋装・洋裁の普及と「和服」1950年代における「直線裁ち」の意味

横林　結*・森　理恵**

The dissemination of western-style clothing and sewing techniques: The meaning of 'Chokusen-dachi' (straight-line cutting and sewing) in 1950s Japan

YUI YOKOBAYASHI* and RIE MORI**

要　旨：アジア太平洋戦争敗戦後の1950年前後の日本において，洋裁・洋装の普及過程で注目された「直線裁ち」は，洋服地と洋裁技術のないままに，「和服」地と和裁の技術をもって洋服を身につける，という困難な課題に対する解決策であった。またそこに西洋の洋服とは違う，「日本人に合った洋服」が求められることにもなった。本研究では，この時期に，多くの服飾関係者や一般の人々が，「日本人にとって洋服とは」という疑問につきあたり，「和服」と洋服との折衷とも言える「直線裁ち」に活路を見出そうとしていたということ，また，洋服に「和服」の手法を取り入れるという方向と，「和服」に洋服の手法を取り入れるという方向との双方向があったことを明らかにした。加えて，和服がほぼ儀礼服と化した現在と異なり，1950年前後の時期は，「日本人にふさわしい衣服」についての議論が活発であり，「和服」と洋服のあり方や両者の関係についてもとらえ方が流動的であることを明らかにした。

（2009年10月1日受理）

1. 研究の背景と目的

アジア太平洋戦争の戦時下から敗戦後は，庶民のレベルで洋装と洋裁が普及・浸透した時期であると言える（柳1992，横田1999，小泉2004a，横川2005，森2008）。敗戦後の衣料不足の時期から衣料統制が解除され，しだいに化学繊維が出回るようになるという時期，すなわち1950年前後の時期に，人々は洋装・洋裁をどのように身につけ，「日本」の「衣服」であるとされてきた「和服」との折り合いを，どのようにつけたのだろうか。

小泉和子はこれを「衣服革命」と呼び（小泉2004a，5），当時，雑誌『暮しの手帖』などで展開された「直線裁ち」について，「洋服が普及し始めるまで和服で過ごしてきた日本人にとって，洋裁はまったく異質の文化，とくに裁断は苦手であった。そこで和裁の手法を生かして，形だけは洋服を作ろうとしたのが直線裁ちである」とする（小泉2004b，154）。つまり，「直線裁ち」は，洋装・洋裁と「和服」との折り合いのつけ方の一例だったのである。

そこで本研究では，上記の小泉の指摘をふまえ，1950年前後の時期における「直線裁ち」について，雑誌『暮しの手帖』およびその他の資料から確認することにより，洋装・洋裁の普及と「和服」との関連の一端を明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

1）雑誌『スタイルブック』，『暮しの手帖』および『婦人朝日』の調査

『暮しの手帖』に先駆けて発行され，「直線裁ち」を紹介した『スタイルブック』と，『暮しの手帖』の主に1950年前後の発行分から「直線裁ち」についての記事を収集し，考察していく。ならびに，「直線裁ち」の主導者であったと考えられる花森安治の衣服観についても同誌より分析する。また，「直線裁ち」の製作者・着用者であったと考えられる女性たちによる，同誌への寄稿

* 元京都府立大学人間環境学部
Previous Student, Faculty of Human Environment, Kyoto Prefectural University
** 京都府立大学生命環境学部服飾文化史研究室
Laboratory of Cultural History of Clothing, Faculty of Life and Environmental Sciences, Kyoto Prefectural University

文についても収集，分析する。さらに，同時期に活躍した，花森以外の服飾関係者の考えについて知るため，雑誌『婦人朝日』から記事を収集し，分析する。花森も参加デザイナーの一人であった『婦人朝日』の服飾記事には，当時の様々なデザイナーのイラストや意見が掲載されており，多くの情報を得ることができると考えられる。

2)「直線裁ち」の衣服の製作・着用

「直線裁ち」の衣服について製作の状況や着心地などを確認するため，雑誌『暮しの手帖』より一例を選んで実際に製作し，着用する。

3. 結果と考察

1) 雑誌『スタイルブック』における「直線裁ち」

暮しの手帖社のウェブサイトによると，暮しの手帖社の前身は「衣裳研究所」であり，昭和21（1946）年3月に東京・銀座で大橋鎮子と花森安治により創業された。そして，「戦後まもない，物の無い時代でもおしゃれに美しく暮らしたいと願う女性への，服飾の提案雑誌」として『スタイルブック』が出版された。

第1号に当たる『スタイルブック　真夏の号　和服地を使ったデザイン』（図1）は昭和21年5月31日の発行であるが，広告が新聞に出ると予約申し込みの郵便為替が連日大量に届き，大当たりだったという（酒井1988，127)。『スタイルブック』は第5号まで発行され，『スタイルブック　真夏の号　和服地を使ったデザイン』と『スタイルブック　1946夏』は全18ページ，『スタイルブック　1946秋』，『スタイルブック　1947冬』，『働くひとのスタイルブック』は全38ページからなる。「デザインもスタイル画も，アクセサリーの絵も，服の型紙も，表紙も裏も，そして文章も，ぜんぶ花森がひとりでかいた」とされる（同，127)。

第1号のサブタイトルからもわかるように，『スタイルブック』では積極的に和服地の更生利用を勧め，真夏の号のトップに紹介されているデザイン4種はいずれも「直線裁ち」である（図2)。続く夏号では「素直な線の美しさ」（図3）で4種，秋号では「美しい線はゆるやかに流れる」で7種，冬号では「新しい魅力　きもの袖の美しさ」で3種，それぞれのトップページに「直線裁ち」を紹介している。『スタイルブック』に掲載されたデザインがすべて「直線裁ち」というわけではないが，トップページには「直線裁ち」を必ず掲載している。

真夏の号の巻頭には次の言葉がある。「さまざまな技巧と偽りの飾りから，明るい太陽と，野をわたる微風の下へ，私たちの体を解放しよう。古代の狩人のようなゆるやかな，素直な美しい線。きよらかで，自然な服装。ここにこそ，輝かしい青春がある。あなたのほんとうの美しさがある」。酒井寛は，「きもの地で洋服を作る。焼

図1　『スタイルブック　真夏の号』表紙
1946年5月

図2　「素直な線の美しさ」
『スタイルブック 1946年夏』1946年6月

図3　「新しい魅力きもの袖のうつくしさ」
『スタイルブック 1947年冬』1947年2月

け残ったのは着物地くらいしかない時代だった。花森はここで「直線裁ち」を打ち出した。「直線裁ち」は，洋裁を知らない人にも，作りやすく着やすい。しかも，いわば廃物利用で時代にも合っていた。花森の合理主義だろう」と述べる（酒井 1988，128-129）。

第1号は大当たりしたが，しだいに類書が現れて売り上げが落ちていく（酒井，1988，131）。そこで，「花森を講師とする「服飾デザイン講習会」が都内や地方都市で開かれ」，「その場でデザインした直線裁ちの服を，大橋はひと晩で縫って，会場で相手に着せて大好評だった。売れ残っていたスタイルブックを会場に持ち込んで，大橋はどんどん売った」という（同上，131-132）。「直線裁ち」が普及していった様子がうかがわれる。

2）雑誌『暮しの手帖』における「直線裁ち」

『暮しの手帖』に掲載された「直線裁ち」についてはすでに小泉和子によりくわしく紹介，考察されている（小泉 2004b）。今回，2008年までの発行分をあらためて確認したところ，合計36本の記事に「直線裁ち」が取り上げられていることがわかった（表1）。掲載頻度

表1　『暮しの手帖』に掲載された直線裁ちに関する掲載記事一覧

巻号	発行年　月	記事掲載タイトル	著者
1号	S23（1948）9	型紙なしで作れる直線裁ちのデザイン	花森安治
2号	S23　12	オーバァの要らない冬の服	記載なし
3号	S24（1949）3	春の直線裁ち	花森安治
		春はブラウスの季節です	記載なし
		女の子の着もの　春から夏の季節に	花森安治
4号	S24　7	これが直線裁ちです	記載なし
		涼しい真夏の部屋着	記載なし
		コドモの直線裁ち	記載なし
		男の夏の服	記載なし
		ゆかたで作る	花森安治
5号	S24　10	紺がすりの美しさ（直線裁ち）	記載なし
6号	S24　12	キルティングと直線裁ち	花森安治
7号	S25（1950）4	直線裁ちと子供たち	花森安治
8号	S25　7	直線裁ちのユカタ・ドレス	花森安治
		暑いときには涼しい上衣を　男の人の直線裁ち	記載なし
9号	S25　10	秋の直線裁ち	花森安治
10号	S25　12	毛糸をあしらった冬の直線裁ち	花森安治
11号	S26（1951）2	春とコドモたちと	花森安治
13号	S26　9	朝から夜中まで（仕事着）	花森安治
16号	S27（1952）9	浴衣のように着る服	花森安治
21号	S28（1953）9	季節のかわりめに（ちょっと羽織る服）	記載なし
25号	S29（1954）9	直線裁ちの３人　女の人のワンピース	記載なし
32号	S30（1955）12	直線裁ちで　おそろいのふだん着	花森安治
33号	S31（1956）春	ぬいとりのある春の服	花森安治
35号	S31　7	夏とコドモと直線裁ちと	花森安治
36号	S31　秋	直線裁ちのジャンパースカート	花森安治
50号	S34（1959）7	ショートパンツと直線裁ち　夏とこども	花森安治
60号	S36（1961）7	夏の部屋着	花森安治
2世紀37号	S50（1975）7/8	夏とこどもと直線裁ちと	記載なし
42号	S51（1976）5/6	そよ風と白い服と　女の子の直線裁ちの服	記載なし
71号	S56（1981）3/4	ドレスの作り方	記載なし
75号	S56　11/12	チュニジアのコートをまねて　ひざ掛けや毛布で作るコート	吉羽ふみよ
84号	S56　5/6	海と子供と直線裁ちと	記載なし
3世紀 3号	S61（1986）7/8	ゆかたの直線裁ちと色	記載なし
45号	H 5（1993）8/9	お母さんの直線裁ちです	記載なし
4世紀27号	H19（2007）春	新しい直線裁ちの服	記載なし

については小泉の指摘どおり，1960年までに集中しており，とくに1948～50年には毎号のように取り上げられている。

内容は外出着，普段着，ウェディングドレスと，衣服の全般を紹介しており，季節的にも春夏秋冬と多岐にわたっている。ただし，オーバーコート類などはないし，外出着はカジュアルなものに限られている。表1からわかるように，デザインはほとんどを花森がおこなっている。

これも既に小泉が明らかにしているとおり，1950年ごろまでは和服地の更生がほとんどであり，1950年に衣料切符制が撤廃され，やがて化学繊維が出回るようになる1952年ごろから新しい洋服地を前提としたものになっていく。ただし，「そうしたなかでも浴衣地だけは一貫して使われ続けているが，この場合は洋服地の代用ではなく，木綿地，白と紺，大胆な柄といった特徴を生かした積極的な使い方となっている」と，小泉は，花森の提案する「直線裁ち」における和服地の再認識についても指摘している（小泉 2004b，157）。

3）『暮しの手帖』にみる花森安治の洋装・洋裁と「和服」に対する考え

「日本人に一番いいスカートの長さ」（1号，1948年），「日本人と西洋人の体の比較」（7号，1950年）などの記事からわかるように，花森は日本人の体形に合うということに重点を置いている。

「ワンピースがいい」（3号，1949年），「ブラウスはブラウスらしく着る」（19号1953年）などの記事では，洋服が普及し始めたばかりで洋服の選び方を知らない日本人に対し，流行にとらわれず，かつ飽きることのないようなデザインが紹介されている。これらから，洋服の流行を批判しつつ，もっと服飾に関する日本人らしい感性を磨いてほしいと訴えかけていると考えられる。形が単純な洋服を勧めると同時に，「直線裁ち」の服の形が単純で裁断図を見ただけで作れそうなものであることを強調し，普及に努めている。

「夏の袖山はプレインに」（4号，1949年），「アロハ嫌い」（12号，1951年）の記事では，日本の風土や環境に合わせたデザインを考えている。「洋服が普及しはじめ洋風のデザインをそのまま真似しただけでは，さまざまな困難がある。日本のように夏が高温多湿なところでは，ギャザアの多い洋風の服は洗いにくいし，シャツをズボンに入れるようなスタイルでは通気性が悪い。また，洗濯のしやすい形が良い」と述べている。花森はこれらを解決するために，「直線裁ち」の良さを生かし，袖はシンプルにしている。また，アロハシャツの形に似たブラウスを紹介している。

「縞は流れを生かして」「洋服に和服のエリをつける」の記事（4号，1949年）では，「洋服を着はじめる前に，和服の形に執着がある人はこのようなデザインから導入しても良い」と述べている。「直線裁ち」は洋服と和服が混合した裁縫技術でもあり，形もそうであるということを主張しつつ，「直線裁ち」の良さを再確認するような花森の考え方がうかがえる。

「柄のある生地よりは無地」の記事（3号，1949年）では，「洋服初心者は着物と同じ派手な柄や模様を選ぶ傾向がある。そうではなくて，洋服は形を考えて，無地の方が美しい」と述べている。また，「飽きない柄と飽きる柄」という記事（13号，1951年）からは，「直線裁ち」の服に使用される布地の柄について説いている。洋服が導入されてから新しい柄も作りだされる中で，縞，水玉，チェックといった柄は，飽きることのない柄として称賛している。よって，「直線裁ち」の服には無地のものや，縞，水玉，チェックといった柄を採用していることが多い。花森は洋服の形や柄を全否定することなく，日本人に似合うものは素直に取り入れている。

また，「冬の外出着はズボン」「東北地方の冬の袖ぐり」（2号，1948年）などの記事で，当時，洋服が流行する中で，モンペの反動からか，多くの女性がスカートやワンピースをはいていたことについて，「わざわざ自分の身を犠牲にしてまで流行を追い，みすぼらしい姿を見せるのではなく，自分の体を寒さから防ぐ工夫をして欲しい」という。他にも，高温多湿の日本の夏に合った服のデザインを紹介している。

「和服地は代用品ではない」という記事（5号，1949年）では「日本の衣文化を失ってはいけない，むしろそれを積極的に生かすべきだ。しかし，これは今の日本では難しいことではあるが，いくら難しくてもこれはしていかなければならない」と述べている。しかも，彼はこれを観念的に言っているのではなく，「和服地をバイヤスに使う」（同上）のように具体的，実践的に書いている。

「ここには新しい女の美がある」という記事（6号，1949年）では，キルティングが流行りだしたこの時代，キルティングの良さを読者に訴え，キルティングで作る「直線裁ち」の服を特集している。和服地の良さを生かした「直線裁ち」の服だけではなく，新しい生地にも目を向け，良いものは実際に製作し提案している。ここでは，和服地だけにはこだわっていない花森の姿勢が見られる。

「裏地にもっと細かい神経を」という記事（1号，1948年）では，「表向きだけに材料や質にこだわらず，裏地にも注意して欲しい」と述べている。「着物の裏地に絹を使うというおしゃれが幕末から持て囃されるようになった。見せない部分にお金をかけておしゃれをするのが「粋」とされていた。このような考えを直線裁ちにも生かしたい」と提案している。

4）雑誌『婦人朝日』にみる他のデザイナーの洋装・洋裁と「和服」に対する考え

次に，花森安治の思想を同時期の他の服飾関係者の思想と比較するため，花森自身も参加デザイナーの１人である，雑誌『婦人朝日』[1]の関連記事を抜粋し，考察を加える。

① 柳悦孝は「きものの反省」（1947年４月号）（図４）で，西洋の流行をただ模倣するのではなく，流行の特徴を生かした着物を作り，新しい日本の美を作ろうと提案している。ここで，着物における必要条件を述べたあと，「直線裁ち」の和服式の着物にアイヌ式のえりをつける服を提案している。

② 田中千代は「洋服のよさを生かした和服」（1950年11月号）で，「直線裁ち」の独特の美しさを生かした，新しい感覚で和服を作り直したい気持ちがあるといい，４種のデザインを紹介している。デザイン画は一見和服のようではあるが，洋服に近い形にし，体にフィットするような服である。また，帯を締めることによってシルエットを引き締めている。しかし，着物の弱点である着るのに時間がかかるという点を，上下別々のツーピースにしたり，肩にヨークを切りギャザーを入れるなどの洋服の技術を取り込んで，新しい感覚の服を提案している。

③ 桑沢洋子は1952年１月～10月に全国各地で「婦人朝日服装相談室」を開催した。読者から送られてくる相談内容について，桑沢が答えるというものである。

1952年３月の「服装相談室」では，身長が低いとか歳をとっているという理由ではなくて，相談者自身の雰囲気から似合う色を選び勧めている。和服のコートでは，普通の袖附けではなく，和服式に肩を自然に落としたラインを提案している。典型的日本人体型の相談者には，補強下着の利用，ジャケットのポケットを大きくしたデザインやウエストラインを上げるデザインを勧めている。

1952年６月の「服装相談室」では，一生着られるほどの和服を持っている相談者から和服の更生について相談された。家の中にある洋服とにらみ合わせて，どうしても必要な洋服に更生できるものを考えてみている。着ていく場所によってレースでゴージャスにしたり，カフスの形を多種提案している。PTA用やパーティー用，妊婦服などを紹介している。

④ そのほか，小沢ちか子の「和服の感覚を生かしたワンピース」（1951年４月号）（図５），山口淑子の「わ

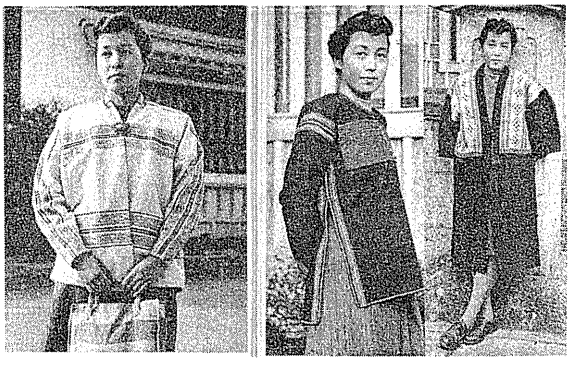

図４　柳悦孝「きものへの反省」
『婦人朝日』1947年４月

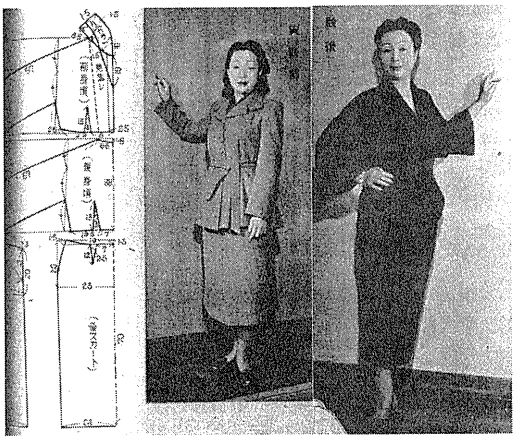

図５　小沢ちか子「和服の感覚を生かしたワンピース」
『婦人朝日』1951年４月

図６　山口淑子「わたしキモノ」
『婦人朝日』1952年６月

1 雑誌『婦人朝日』は，戦前の「婦人」（1924－1937），「婦人朝日」（1937－1942），「週刊婦人朝日」（1942－1943）を前身として，1946年２月に創刊され，1958年12月に終刊した月刊誌である。女性を対象とし，時事問題から衣食住，文化までを幅広くあつかう総合誌である。発行は朝日新聞東京本社のち朝日新聞社，B5判で，文芸誌的性格を強めた最後の２年間はA6判となった（森2008）。

たしキモノ」(1952年6月号)(図6)など，洋服が流行する中でも着物に慣れ親しんできたことを重く見て，洋服と和服を混合した服を紹介する記事が多い。裁断方法は洋裁であっても，デザインから見ると，和服に帯を巻いていた感覚から，腰にベルトや帯をつけるデザインが多い。

⑤　「日本の布　日本の色」(1952年9月号)では，日本に古くからある紬を取り上げている。日本の優れた感覚と素材を近代的な角度から，もう一度，洋服の世界で解釈し，取り上げていこうという試みである。

5)『暮しの手帖』にみる他の人々の洋装・洋裁と「和服」についての意見

『美しい暮しの手帖』には創刊号から，読者および小説家，研究者，デザイナーなど様々な人からの投稿を掲載している。「難しい議論や，もったいぶったエッセイは載せないつもりです。それが決して，いけないと言うのではなくて，そうしたものは，それぞれのものが，もう，いく種類も出ているからなのです。(中略)どの雑誌も，同じような記事を載せることは，つまらないと考えたからなのです」との編集方針から，一般人にも理解しやすい，より良い暮しを送るための工夫や知識を紹介している。この投稿の中から，「直線裁ち」についての意見や，衣生活に関しての考え方を抜粋し，考察していくことにする。

①　和田実枝子(和田信賢夫人)の投稿「きるもの」(1号，1948年)によると，この当時はすでに洋装が浸透していて，特に仕事をしているほとんどの女性は動作のしやすい洋装であった。筆者は洋服が似合わないと思っているが，社会的な変革が洋服を着させるように義務づけた。その理由の1つは戦災で衣類が残っておらず，知人から頂いた着物はそのままでは着られない状態であるので，仕方なく洋服に変えて着なければいけなかった。2つめは，仕事場へ行くための満員電車の中では和服は厄介であったからである。「その頃知人から直線裁ちのことを知り，さっそく紫の着物で作った。すると無数の美しい線が生まれ戦災の憂鬱を吹き飛ばすことができた」と述べている。このように，今まで着物に慣れ親しんできた和田は，戦後における女性の社会進出とともに運動面を重視した洋服が義務づけられたことに戸惑いを感じている。洋服に自信がない人は，和服と洋服の2つの良さを持ち合わせた「直線裁ち」が有効であると感じている。

②　大橋鎭子(衣裳研究所々長)は『暮しの手帖』の編集者の1人である。花森がデザインした「直線裁ち」の服を，大橋が実際に製作し着用した写真が暮しの手帖に掲載されている。その感想として，「直線裁ち」(1号，1948年)で，「製作面では短時間かつ簡単にできる。着心地に関しても和服地の大柄を楽に着こなすことができる。また，女性だけではなく，男性のジャンパーものにでも，直線裁ちは有効である」と良い点を挙げ，「直線裁ち独特の「イキ」がある」と述べている。

③　やまとあこ(主婦)は「直線裁ちによせて」(3号，1949年)で，「終戦後の洋服の普及の中で，着物が復活しているのは何故かと疑問に思っている。洋服に足りないものを補え，かつ経済的で日本の生活様式とも上手く溶け込める新しい日本服を要求していた。その頃，『美しい暮しの手帖』で直線裁ちのことを初めて知り，これで夢が実現する」と述べている。簡素でなおかつ美しい「直線裁ち」を絶賛している。前述の和田の意見と同様，『スタイルブック』や『美しい暮しの手帖』で「直線裁ち」のことを知り，「直線裁ち」を大いに評価している。

読者たちは，「和服」が再び着られるようになったことをきっかけとして，洋服の意義を考え直した。やはり，日本の伝統衣装である着物の優美さや，裁縫や洗濯が簡単なことを忘れることができなかったのであろう。一方で着物を着用したときの不便さがある。この相反する矛盾点を解決したのが「直線裁ち」の服であり，新しい日本服として考えられたのである。

また，終戦後の和服と洋服の二重生活の時代に，「直線裁ち」には直接触れていないが，次のような意見もある。

④　水谷八重子(女優)は「古くて新しい着もの」(6号，1949年)で「新聞で，米国婦人が浴衣地や市松模様のワンピースを着ていると知り，明朗で自由奔放と感じた。我が国の古来の模様は他の国と比較しても劣らないものであり，これらを応用し現代的感覚に生かすことが求められるのではないか」と述べている。

⑤　三井高陽(交通文化研究家)は「猿真似の国」(7号，1950年)で「今の日本婦人の服飾は，欧米の洋服をただ真似して取り入れているだけだ。そうではなくて，もっと自分をよく知って服飾を考えることが男女ともに必要である。外国の雑誌を真似して洋裁を教えるのではなく，創意と工夫をする手助けを与える事を婦人雑誌に望む」と述べている。

⑥　赤松常子(参議院議員)は「和服と洋服」(9号，1950年)で「今の中年女性には，長い畳の生活から身についてしまった姿勢により，洋装が似合わない。そして，和装は織物の巧緻さや技術の優美さを示す点で良く，活動的でない点で不自由である」と説明し，「今の和服に動的な面の改良が必要である」と述べている。

⑦　長谷川春子は「男の夏服をどうするか　直線裁ち」(18号，1952年)で，「夏の男の服に直線裁ちの服が適しているのではないか。夏を涼しく過ごせて，洗濯代も安く済み，寝巻にもいいのではないか」と述べて

いる。「直線裁ち」は，男女，季節に関係なく，便利なものと考えられていたことが推測できる。

和服と洋服が混合していたこの時代では，洋服の普及の早さに戸惑いを感じ，日本人には洋服が似合わないと思っている人が少なくない。一方で，和服に対しては伝統を失いたくない気持ちとは裏腹に，洋服と比べて活動性が劣ると非難している。洋服和服ともに賛否両論の意見がある中で，ただ単に外国の真似をするのではなく，この時代だからこそ洋服の改良または和服の進化が求められ，新しい服ができないかと願っている人が多く見受けられた。

6)「直線裁ち」の衣服を製作・着用

1世紀16号（1952年6月）の62ページに「浴衣のように着る服」として紹介されたデザインのうちの1つを実際に製作し，着用した（図7～10)。「これはネマキかしらと思うかもしれない。ネマキに着たって悪くないが，家の中や海岸で，こんなゆるい服をひっかけてみようと思う人はないだろうか。サンダルは下駄である。ことわるまでもなく，素足でなければ妙である。浴衣に足袋をはくのが妙なのと，同じことである」と説明されているものである。着られなくなった浴衣の更生として紹介している「直線裁ち」の服であるが，裁断図のみで製作手順は掲載していない。当時の人々は，図面を見ただけで製作できたと思われる。

① 長　所

私は裁縫についての知識はほとんどないが，「直線裁ち」の服は大変簡単に製作できる。まず，洋裁と比べて，型紙を必要とせず裁断に移行できるのは，時間短縮につながる。また直線に裁つので，裁断，縫製ともに簡単である。直線で裁つことによって，布地に無

図7　「浴衣のように着る服」
『暮しの手帖』1世紀16号

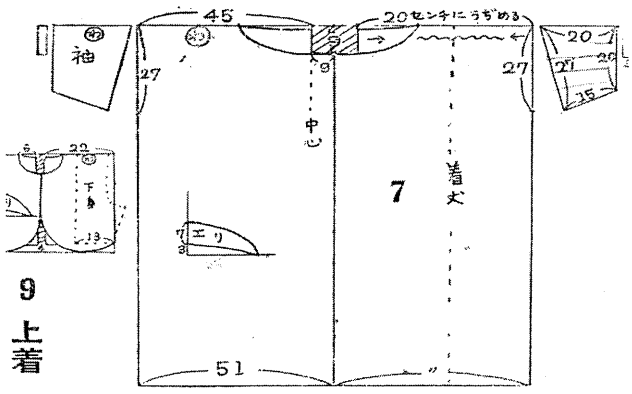

図8　同　裁断図

駄なスペースができず，余った布も次回使用しやすいし，ごみも少ない量で済んだ。

ここまでは，花森や大橋が述べていたとおりであるが，製作が簡単であるのはもちろんのこと，応用が効くということを発見した。具体的に言えば，デザイン画の襟やカフスやポケットなどが気に入らなければ，他のデザインのものを取り入れることができる。他にも，デザインがシンプルゆえに，違う柄の布やレースやリボンを付け足して，自分のオリジナルなものを製作することができる。

また実際に製作し着用してみて，自分の思いどおりの丈や形でなかった場合は，直線で裁ち縫いしてあるので，手直しがしやすいということもわかった。

② 短　所

「直線裁ち」の服は，体に合わせて作るものではないので，余裕をもって裁断することになる。つまり，身体に合わせて曲線に裁つ洋服を作るよりも生地をたくさん要することになる。和服の更生として利用するのであれば良いが，生地を自分で用意するとなると生地代が高くつくと予想される。

実際に着てみて感じたことは，体の線に合っていないので，着心地が良いとは思わなかったことである。

また，直線で裁つことによって，形を変化させることに限度があり．洋服と比較すると「直線裁ち」の服のデザインの種類は豊富ではないことが推測できる。

③ その他

1960年ごろまでの『暮しの手帖』に掲載された「直線裁ち」の仕立て方の記事には，寸法が欠落していたり，縫製方法が明確に記載されていないものがある。今回製作するにあたり，洋裁を学んだ方からのアドバイスを受けながら，襟付けや肩のギャザーには時間がかかったものの，何とか作り上げることができた。裁断や縫製をしていく段階において，製作者は試行錯誤を繰り返し，独自の裁縫知識によって衣服を仕立てていたことがうかがえる。

『暮しの手帖』における「直線裁ち」の記事において，製作するための説明が十分ではなかったとは言え，専門家ほどの技術がなくても簡単な寸法と実際に「直線裁ち」の服を着ている写真が掲載されていることによって，裁断が容易となり，一般家庭でも「直線裁ち」の服を製作することを可能にしたと考えられる。

また，戦後直後の状況を考えれば，和服の再利用ができるという合理的な要素と，経済的に洋裁学校に通うことができず和裁の知識しかなかった人々にとって，大変便利な裁縫技術であったことがうかがえた。

4. まとめ

小泉和子が指摘するように，「直線裁ち」は，洋服地と洋裁技術のないままに，「和服」地と和裁の技術をもって洋服を身につける，という困難な課題に対する解決策であった。またそこに西洋の洋服とは違う，「日本人に合った洋服」が求められることにもなった。本研究で明らかになったことは，この時期に，花森安治だけでなく多くの服飾関係者や一般の人々が，「日本人にとって洋服とは」という疑問につきあたり，「和服」と洋服との折衷とも言える「直線裁ち」に活路を見出そうとし

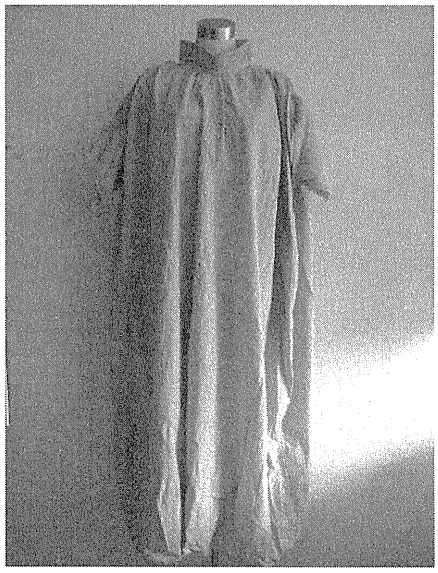

図9　製作品　前面

図10　同　背面

ていたということである。また，「直線裁ち」のように洋服に「和服」の手法を取り入れるという方向と，『婦人朝日』に見られた田中千代や山口淑子のように，「和服」に洋服の手法を取り入れるという方向との双方向があったことも確認できた。そのような中で，柳悦孝のように，「和服」だけでなく「アイヌ」の服など日本列島に居住する他の民族の衣服に着目するものもあらわれた。

和服がほぼ儀礼服と化した現在と異なり，1950年前後の時期は，「日本人にふさわしい衣服」についての議論が活発であり，「和服」と洋服のあり方や両者の関係についてもとらえ方が流動的であることが明らかになった。

参考文献

小泉和子（2004a）「洋裁の時代」とはどういうことか，『洋裁の時代　日本人の衣服の革命』OM出版，5-8
小泉和子（2004b）『暮しの手帖』の直線裁ち，『洋裁の時代　日本人の衣服の革命』，OM出版，154-164
酒井寛（1988）『花森安治の仕事』，朝日新聞社
田中千代（1969）『田中千代　服飾辞典』，同文書院
武庫川女子大学関西文化研究センター（2009）『洋裁文化隆盛の時代』，武庫川女子大学関西文化研究センター
森理恵（2008）1950年前後の日本における都市中流女性の衣服製作・着用をめぐる状況：雑誌「婦人朝日」記事の分析を中心に，『日本家政学会誌』59(3)，155-164
柳洋子（1992）『衣生活社会史』，ぎょうせい
横川公子（2009）プロローグ，『洋裁文化隆盛の時代』，武庫川女子大学関西文化研究センター，3-5
横田尚美（1999）戦中ファッション再考，『ファッション環境』，9(2)，54-59

『暮しの手帖』1世紀1号 ── 最新号（1948年9月－）
『婦人朝日』（1947－1952年）

暮しの手帖社HP/会社案内　http://www.kurashi-no-techo.co.jp/index.php/company